

秋彼岸法要 九月二十三日（土曜日＝秋分の日） 午前十一時から

彼岸法要後

おこと 琴 コトコ

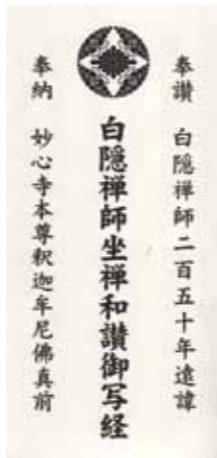
一年前の秋はバイソン片山さんでジャズだったから、今年は急ハンドルをきって邦楽を楽しみます。奏者の遠藤琴音さんは六歳から琴をはじめたという生粋の邦楽奏者。もうひとりの木ノ瀬佳子さんは音楽大学にフルート専攻で入学しながら、琴の魅力にとりつかれたという逸材。一本の大道をひたすら歩くのは正々堂々として清々しいけれど、異なる道へ勇気をもって進む姿には凄みがある。乞うご期待。

12月	10日(日) / 23日(土) / 24日(日)
11月	12日(日) / 25日(土) / 26日(日)
10月	8日(日) / 2日(土) / 22日(日)
9月	10日(日) / 23日(土) / 25日(日)
8月	お盆行事のため、一ヶ月休会
7月	9日(日) / 22日(土) / 23日(日)

(第二日曜日・第四土曜日・第四日曜日です)

左記日程の午後1時半から4時半まで本堂で写経ができます。都合の良い時間に来て、ご自分のペースで写経して、お好きな時間にお帰りください。ただし、初めての時はなるべく一時半にご参集ください。もちろん、檀家さん以外でも参加できます。お友だちを誘ってお越しください。

あつまれ! 写経の日程



編集後記

○冒頭で「漱石と禅」の第一弾・鎌倉円覚寺での日曜説経会の様子を書きました。第一弾というからには二弾があるわけです。二弾は東京駒込に養源寺という妙心寺派のお寺があります。そこには『坊っちゃん』に登場する下女の清の墓がある。

『坊っちゃん』は小説だけど、登場人物のなかには実在の人もいます。という複雑な話になるので、その清の墓をお参りして、九月にオープンする新宿の「漱石山房記念館」を見学して……、という計画を企ててみたのですが、東京新宿だから別にグループを組織していく必要もない。というわけで、第二弾は自主研修にします。

○自主研修などわかりにくい書き方ですが、端的にいうと秋は何もやらないということです。そのかわり来春五月頃、漱石となじみの深い熊本へ行きます。漱石は旧制第五高等学校の教員として熊本で新婚生活を過ごしていますし、『草枕』『三四郎』など漱石作品と関連ある土地です。昨年の地震で大きな被害をうけた熊本です。被害を受けたからこそ観光するのが何よりの支援になるのでは！でも、漱石といえば『坊っちゃん』。『存じ』のとおり、愛媛県松山市が舞台です。今回は熊本経由で松山へ行く二泊三日の旅になるでしょう。ちょっと忙しいけれど四国から九州へどう渡るのか？平成三十年正月のお便りでお知らせします。

○平成三十年は平成という年号の最後の年になりそうです。次ぎは○○元年になるのでしょうか、その昔、元年にかこつけて失敗したあわて者者話があります。面白い話は機会を改めて。

不連続シリーズ

見つけた!

街かどに禅を探し、現代に仏教を見つける

百日告别



「百日告别」監督・林書宇〈トム・リン〉
英題・Zinnia Flower (ひやくにちそう)
2015年/台湾/中国語/日本語 96分

五月とはいえ、暑い日でした。横浜へ行きました。『百日告别』というタイトルの台湾映画を見るためです。映画は台北郊外の高速道路上での玉突き事故のシーンから始まります。凄絶な現場を写すカメラの背後に流れているのは、シヨパンのピアノ曲。その事故で、婚約者をうしなった女と、身重の妻を亡くした男が主人公です。生き残ったふたりは、山の上の寺で初七日忌法要に参列します。ふたりに面識はなく、配られた経本も声にならない。これは映画の監督(林書宇)が、妻を亡くした経験から作られています。

監督自身はキリスト教信者ですが、亡くなった妻が仏教徒だったので、初七日忌から百日忌まで寺へ通って、構

想が浮かんだといえます。

こんなシーンがあります。監督の現実とは異なり劇中では、キリスト教信者だった亡き妻の友人たちが、落胆する男の家にやってきて、賛美歌を歌い生前の妻の話をして慰めてくれます。その中に、「私も数日前に愛犬を亡くしたの」と涙ぐむ女性がいいます。無神経な慰めです。男は寄り添われることが苦痛になり、「帰ってくれ」と叫びます。

そして、二七日忌。男は山の寺の法要へ向かいます。お経を読む声も少し大きくなっています。監督は仏教に好意的です。でも、批判も忘れません。

こんなシーンもありました。婚約者を亡くした女は、彼の故郷・高雄で行われた仏式の葬儀に参列します。でも、形式ばかりの進行にたえられず、斎場を飛び出して行きます。そして、四十九日忌の帰り道に婚約者を亡くした女が、妻を亡くした男に語りかけます。

「法要は死者の供養というけれど、毎回死んだことを私たちに思い出させて。手放させるための期限みたい」

仏教は悲嘆してくれる人たちが涙を卒業(卒哭)するため、初七日から始まり、百日忌までの中陰の法要を営んできました。

そうした儀礼制と習慣性に助けられたキリスト教信者の映画監督の実体験から作られたので、説得力があります。必見の映画です。が、台湾映画でもかもテーマが卒哭忌ですから、上映している劇場が少ない。観る機会が少ないから、こうして書く価値があります。(6/17〜下高井戸シネマ。7/8〜宇都宮ヒカリ座で上映)